

被災地支援ヒマワリのつえ

中津のグループ

茎で30本製作「震災忘れない」

中津市三光佐知の地域おこしグループ「竹馬会」（佐賀一彦会長、70人）は、東日本大震災の被災地を支援するために育てたヒマワリの茎で、30本のつえを作った。来年以降も続ける予定で、同会は「お年寄りたちに使ってもらい、ヒマワリを通して被災地との絆を深めたい」としている。

（柿本高志）

竹馬会は2011年3月の震災後、福島県内のNPO法人が展開する「福島ひまわりの里親プロジェクト」に参加。NPOから種を買い、地区の畑で約6000本のヒマワリを栽培、花を觀賞した後の種を送り返し、福島に植えてもらっている。

今年3月、同会事務局長の相良卓紀さん(57)が、福島県で開かれた「第1回ひまわり甲子園」に九州代表として招かれ、活動状況を報告。その際、住民グループが茎をつえにして再利用

ヒマワリの茎でつえを作る作業をする竹馬会の会員たち

していることを知り、グループの指導を受けながら、つえ作りに取り組むことにした。

種を採取後、真っすぐな茎を約2か月間、倉庫などで自然乾燥させる。今月中旬、茎を約120センチに切りそろえ、表面をヤスリで磨いてニスを塗り、地面に接する先端部分をテープで補強して仕上げた。竹のつえよりもずっと軽く、1本200センチ前後しかない。佐賀会長は「散歩で使う

程度なら、強度も問題ない。安全性をチェックし、来年はもっと多くのつえを作りたい」と話している。

同会は、全国で初めて休耕田を利用した泥んこバレーボールを始め、今年6月に25年間の歴史に幕を下ろした。相良さんは「お年寄りや子供たちにつえ作りに参加してもらい、被災地を忘れない気持ちを広げたい。泥んこバレーに代わる名物行事になればうれしい」と話した。